

不器用令嬢の百合は難しすぎる！

【第2話】

みなぎし  
すい

【人物一覧表】

沢良宜明那（12）（現在）：社長令嬢

沢良宜大河：企業の社長

沢良宜凜花（37）：警官

山田岬（30）（現在）：沢良宜家の

使用人

青宮院綾：金持ち令嬢

大道永遠（17）：明那の幼馴染

田中寛子：学生

3の3担任（40）：教師  
女子生徒A

○学校・3の3教室

沢良宜明那「え、えっとどういうことかしら？」

明那、体を動かして顔を赤くし、あたふたする。

綾、顔をしかめる。

田中寛子（17）「あ！　そ、その。あああなたと友達になりたくて！」

明那「あ、わたしと？」

青宮院綾（17）「ちよっと、勝手に間に入らないでくださるかしら？　沢良宜さんはわたくしのライバルなのに」

寛子「わたしのほうが沢良宜さんの横にふさわしいわ」

綾「横程度で満足なさってるの？　沢良宜さんに認められたいなら横でなく上を目指しなさい！　ライバルを名乗れないで沢良宜さんの横なんておこがましいですわ！」

寛子「わたしの学力なら沢良宜さんのパート

っ、友達にふさわしい！」

2人の視線がバチバチする。

明那「ふ、2人とも、落ち着いて」

明那、なだめる。

2人、落ち着く。

○沢良宜宅・明那の部屋（夕方）

明那と岬、2人きりで話をしている。

明那「——ってことがあって」

岬「そうなのですね。お嬢様はどちらがよろしいのですか？」

明那「ええっ、そそそれはちよつと！ 山

田さん、何言ってるの！」

岬「ふふ、すみません。そうすれば、百合ができるではないですか」

岬、にこつと笑う。

岬「青宮院様はまだお帰りになっていないのですか？」

明那「父親に会ってからくるって。それより、明日転校生がくるって」

岬「まあ。女の子だったらいいですね」

明那「もう！ 山田さんったら！」

岬「かわいいですよ、お嬢様」

明那「！」

※ ※ ※

（フラッシュ）

岬に風呂でえっちなご奉仕される明那。

※ ※ ※

明那、赤くなった顔を隠す。

明那「うっ！ こ、こんな妄想破廉恥よ！」

岬「声が漏れています、お嬢様」

明那「ひゃうっ！」

岬「私は嫌ではございませんので、お気にな  
さらず」

明那、縮こまる。

N「明那は、えっちなことに興味があるわりに  
恥ずかしがりなのであった」

明那「ううっ」

明那、まだ顔が赤い。

インターホンが鳴る。

○同・玄関（夕方）

綾、靴を脱ぐ。

綾M「よかった。沢良宜さん、明るいですわ。  
もし暗かったらと思うと」

沢良宜凜花（37）「あら、あなたが青宮院  
さん？」

凜花、顔を出す。綾のもとに歩く。

綾「はい。わたくしの勉強のために居候させて  
頂き、ありがとうございます」

凜花「青宮院さん、明那と仲良くしてあげて  
ちょうだいね。あの子、昔は違う家において  
大変で、幼馴染とはなればなれになってる  
の。幼馴染の子が差別を受けてたらしくて」

綾「そう、だったんですね」

綾、少し悲しそうな表情をする。

綾M「その話……」

綾、凜花に軽くお辞儀をして明那の部  
屋へ向かう。

○同・明那の部屋（夕方）

綾が部屋に入ってくる。

明那「おかえりなさい」

綾「沢良宜さん！ 今日の宿題、どっちが早く終わるか勝負ですわ！ 勝ったら、その棚のものを読ませてもらいますわ！」

明那「ええっ！ そそそれはちよつと」

明那、焦る。

綾「また恥ずかしいの見られたくなかったら、わたくしに勝つことですわ！ 本気の沢良宜さんを越えてこそ意味があるのですわ！」

明那「ちよ」

岬「では、私が審判になりましたようか。それでは、スタートです」

明那「ちよ山田さん！っ！」

明那、岬の服を掴む。

岬M「尊いです、親愛なるお嬢様。わたしとすることが、お嬢様の百合見たさに青宮院様の希望を聞いてしまいました」

岬、ほほえみながら2人を見守ってる。

○沢良宜宅・明那の部屋（夕方）

綾、百合漫画を読んでいる。

明那、赤くなった顔を両手で覆いながらベッドで足をバタバタさせている。

明那「なんてこと、わたしが負けるだなんて！」

綾「まあ、こんなもの読んでて怒られませんの？」

明那、足の動きを止める。

明那「ここはわたしと山田さん以外入れないからいいの……」

綾「……」

明那「も、もういいでしょ……」

綾「動揺して力が発揮できなかったのかしら

？」

岬「では、ご入浴にしましょうか」

○田中宅・寛子の部屋（夜）

寛子「こんなメガネかけてたら芋臭い。ちよ



つと不便だけど外そう」

寛子、メガネをケースにしまう。ケースをかばんのポケットに入れる。  
綺麗な顔があらわになる。

寛子「沢良宜さん……」

寛子、顔を赤らめながら胸に手を添える。

○学校・3の3教室（朝）

3の3担任（30）「きょうは新しく入ってくる生徒さんを紹介します」

女教師、教壇に立っている。

生徒たち、新入生の話題について話している。

明那「どんな子が来るのかしら。転校生って言い方をしてないのは、どういうことかしら」

綾「わたくしが沢良宜さんのライバルなのは変わりませんから！ 覚えてくださいまし！」

明那、顔を赤らめる。綾から視線を逸  
らして胸に手を添える。

明那 M 「あんな醜態を晒しちゃって、こんな  
んじゃ青春百合恋できないわ！」

※ ※ ※

（フラッシュ）

綾と同じ湯船に入っている明那。

※ ※ ※

明那 M 「っ！」

明那、顔を横に振る。

3 の 3 担任「それじゃ、入ってきて」

扉が、ゆっくりと開く。

青いメッシュをした小柄で痩せている  
女の子が、自信なさげに教壇に立つ。

明那「え、なんでここに」

綾「知り合いですの？」

大道永遠（17）「え、えっと。大道永遠（  
だいどう とわ）です！ 今までは学校に  
行けてなかったけど、なんとか追いついた  
からきまつ！」

永遠、舌を噛む。あたふたしながら、  
黒板に自分の名前を書ききる。

女子生徒 A 「え。ドジっ子？」

クラスメイトたち、永遠の話題でざわ  
ざわする。

3 の 3 担任 「それじゃあ、沢良宜さんの隣が  
空いてるからそこに座って」

永遠、ゆっくりと明那の隣の席まで歩  
いてくる。

ゆっくりと、席に座る。

永遠 「あ、明那ちゃん！ 会いに来たよ！」

明那 「無事だったの？」

永遠 「うん。保護してもらえたから」

明那 「あ、そっか。その髪、エターナルかな  
？」

明那 N 「この学校は、自由な校風で学力がそ  
れなりに高い」

永遠 「うん！ エターナルならカッコいいで  
しょ！」

明那 「そうだね、カッコいいし、かわいいよ」

永遠「えへへ」

永遠、笑う。

綾「お、幼馴染ですの？」

永遠「うん、そうだよ！ 新しい名前も、これがいいって言ったの！」

綾M「なんてこと！ またライバルが増えてしまったってことですか？」

○同

チャイムが鳴る。

永遠、明那にクラスラインの追加を手伝ってもらう。

永遠「昼休みだね！」

永遠、にこにこ笑う。

4人、弁当箱を開ける。

永遠「これ、作ったの。食べて……」

永遠、もじもじしながらタコさんウインナーを差し出す。

明那「ん、ありがと」

明那、タコさんウインナーをほおばる。

永遠「嬉しい！ 明那ちゃんが食べてくれた  
！」

永遠、嬉しそうに笑う。

綾「なな、何やってますの沢良宜さん！」

明那「幼馴染だから普通よ」

永遠「……」

永遠の表情がすんっと真顔になる。

寛子「大道さん、沢良宜さんとどういう関係  
？」

寛子、微妙な表情を永遠に向ける。

明那「永遠ちゃんは色々あったから、優しく  
してくれると嬉しい」

永遠「明那ちゃん」

永遠、明那の手を取る。

明那「永遠ちゃん？」

永遠「寂しいよ……明那ちゃん……」

綾「なにしていますの！」

永遠「ひっ！ ご、ごめんなさい……」

綾「あ、ごめんなさいわたくしも言い過ぎま  
したわ」

綾、焦る。

永遠「明那ちゃん……こんどの日曜日、遊ぼう？」

明那「うん、そうしょっか」

永遠「う、嬉しい！ いっぱいかわいい服とか着てくるからね！」

寛子「わたしも行く」

明那「うん、いいわ。ところで、田中さんって賢いけど、どうやって勉強しているの？  
よければ教えてもらえないかしら」

綾「沢良宜さん！ そんな簡単に教えを求めていいんですの？」

明那「わたしはひたすら高みを目指すだけ。  
そのためならなんだってやるんだから。お父様からは主席維持を求められているけど、別にちよつと落ちたくらいでそこまで怒られないわ」

綾「わ、わたくしも負けませんわ！」

永遠「わ、わたしにも教えて！」

寛子「しょうがないなあ。わかったよ」

寛子、ため息交じりに返事をする。

寛子、しばらく3人に勉強方法を教える。

永遠「明那ちゃん！もっと賢くなったらそばにいてもいい？」

明那「別に賢くなくても、傍にいていいわ」

綾「たとえそうでも、わたくしはやる気は捨てませんわ！」

永遠「わ、わたしだって」

永遠、明那の腕を掴む。

明那「わっ。どうしたの」

永遠「明那ちゃんといちばん長くいたのはわたくしだもん！」

明那「そうだね」

永遠「いちばん仲いいんだもん！」

明那M「永遠ちゃん、わたしに会えなくて今までずっとさびしかったんだ。一緒にいてあげなきゃ」

綾「わたくしだって、沢良宜さんから同居：  
：じゃなくて居候の許可いただきましたわ」

○同・校門

永遠「明那ちゃん！　日曜日、遊ぼうね！」

永遠、明那に向かって手を振る。

綾「むう」

綾、むすつとする。

○沢良宜宅・明那の部屋（夕方）

岬、ベッドに座っている明那の肩を揉んでいる。

明那「日曜日、遊びに行くことになったから。

幼馴染の永遠ちゃんが転入してきて」

岬「そうですか。いつてらっしゃいませ」

岬、肩揉みを少し強くする。

明那「あ、気持ちいい」

綾「むう……」

綾、不機嫌そうにむすつとしている。

綾「むう！」

綾から大きな声が発される。

明那「どうしたの」



綾「わたくしの事はどうでもいいんですの？

わたくしとお友達になりたいって言ったのは嘘だったんですの？ わ、わたくしは」

綾、明那をじっと見つめる。

明那の視界に、綺麗な綾の顔が映る。

明那「……」

明那、目を見開く。

明那の頬がぼっと赤くなる。心臓の鼓動がはっきり聞こえてくる。

明那、きゅつと自分の手を握る。

綾「はっ」

綾、一瞬固まる。

綾「わ、わたくしはライバルですわ！」

明那「そう……」

明那、胸を押さえてしゅんとする。

岬M「なんとこれはまあ。お嬢様も青宮院様も……これはわたしが、サポートしなければなりませんね」

岬、くすりと笑う。

岬M「ですが、わたしから伝えるのは御法度

です」

岬「お嬢様。わたしも同行いたします」

明那「ありがたいけど、どうして。家事は大丈夫なの？」

岬「使用人は他にもいるではありませんか。それに、わたしをそばに置いてくださったのはお嬢様なのですよ」

○（回想）同

岬（30）「今日からお嬢様にお仕えすることになりました、山田岬と申します」

岬、明那にお辞儀する。

明那（12）「はい！　これよしよししてね！」

明那、ぬいぐるみを差し出す。

岬、ぬいぐるみをなでなでする。

明那、満面の笑みになり、

明那「わーい！」

ぬいぐるみを高く掲げてバンザイする。

岬M「なんとかかわいらしい笑顔でしょう。こ

れは、わたしが生涯をかけてお守りせねば  
いけませんね」

（回想終わり）

○同（夕方）

明那「懐かしいわ。今は恥ずかしくて、ぬい  
ぐるみ抱いて寝ることはあまりなくなった  
けど」

岬「ええ。では、そろそろご入浴を」

綾「ご入浴の時間は一定？」

岬「いえ、そうとは限りませんが基本夕方に  
ご入浴します」

綾「そう」

○同・浴場脱衣所（夕方）

3人、服を脱ぐ。

明那「っ！」

明那、綾の裸を見て視線を逸らす。

心臓の鼓動が早くなる。

明那M「なんでこんなに……」

明那、胸を手で押さえる。

岬 M「お嬢様……」

○同・大浴場（夕方）

窓からきれいな夕日がのぞく。

綾「沢良宜さん」

綾、後ろから声をかける。

明那「ひゃうっ！」

明那、声が裏返る。

明那「ど、どうしたのかしら？」

綾「日曜日、どこに行くか決めてますの？」

明那「えええ、え、えっと……」

綾「決めてませんか？　でしたら沢良宜さんの行きたいところでいいですけど。どうしますの」

綾、明那をじっと見つめる。

明那「あ、えっと……せ、青宮院さんが考えておいて！」

明那、急ぎ足で洗い場に行き、風呂椅子に座る。

綾「あらそう。じゃあ、決めさせていただきますわ」

○同・明那の部屋（夜）

明那と岬の2人きり。

明那「はあゝあ……一緒に決めたかったのに」

明那、布団に潜った状態で大きなため息をつく。

岬「お嬢様、青宮院様のことをどうお考えですか？」

明那「漫画に出て来そうなお嬢様って感じ」

岬「いえ、お嬢様が青宮院様とどういうご関係になりたいのかです」

明那「え、えっとそれは……」

岬M「このくらいの気づきを与えるのは問題ありませんね」

岬「私が思うに、お嬢様は初めてのことでいろいろお悩みになっている様子。青宮院様は何か買いたいものがある之行って出かけてしまいました」

明那「使用人に頼まず自分で行くあたり、きつちりしてるわね……」

岬「どうか、今のうちにご相談を」

明那「山田さん……」

明那、岬を見つめる。

明那「青宮院さんを見ると、なんだか……」

明那、布団をきゅっと掴む。

岬「では、青宮院さんが他の女の子、いえ、男の子でもいいです。お嬢様以外と親密な関係になっていたとしたら、どう思いますか。決して口外いたしませんので、うしろめたいことでも素直な気持ちをお答えください」

明那「……」

明那、しばらく黙り込む。

岬、明那に優しく触れる。

明那「やだ……わたし以外だれもいてほしくない」

岬「でしたら、それは恋でございます」

明那「そう、なの？」

岬「はい」

明那「でも、永遠ちゃんとか友達だし、いてほしくないなんて言えない」

岬「お嬢様、わたしが思うに、その2つの気持ち共共存することは矛盾ではないと思います。わたしがサポートいたしますので、一緒に頑張りましょうね」

明那「うん……」

岬、明那の頭をなで、そばにそつとぬいぐるみを置く。

綾、扉を開けて入室。

綾「ただいまですわ」

岬「なんのお買い物？」

綾「チョコの手作りキットですわ。日曜日に遊びに行くでしょう」

岬「家の者であれば、厨房をお使いいただけます。もちろん青宮院様もその1人です」

綾「ありが……あ、これはお世話になってる山田さんのためですわ！」

岬M「なるほど、だからこんな夜遅くに買い

物に行ったのですね。少し不安でしたが、  
使用人を同行させたので大丈夫でしたね」

岬、窓をじっと見つめる。

窓に、岬の姿が映る。